

一宮市三岸節子記念美術館

三岸節子 〈短歌ポスト〉 入選作品（令和三年前期分）

選者 小塩卓哉（中部日本歌人会顧問）

【優秀作】

自画像

若き日の節子は画布に色を置く自画像の目に見つめられつつ

愛知県犬山市 有本 仁政

〈評〉

自画像が完成していく時の様子はまさにこのような感じなのかもしれない。キャンバスに置いた絵の具によって自分の瞳や顔が立ち現れてくると、その瞳に自分が見つめられるのだ。まだ無名時代の節子が渾身の集中で絵を描く様子を彷彿とさせる。

自画像

どこかで会ったかなすこし生意気なあなたの瞳恋をしろと言う

愛知県一宮市 水野 佐紀

〈評〉

上二句が破調だが、それがかえって読者をどっきりさせる働きがある。そんなことはあるはずもないのだが、作者には、節子にどこかで会ったことがあるような既視感があり、なおかつその瞳は、挑発的に自分に恋をしろと言っているような気がしたのである。若き日の節子と作者との交流が成り立った瞬間の歌である。

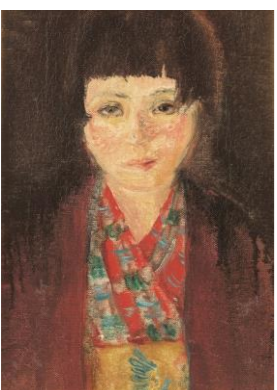
自画像

春色にほった染めた面影を北国からの旅先に見る

神戸大学 杉本 道春

〈評〉

北国からの旅の途中で本館に立ち寄った作者なのだろう。節子の自画像に向き合うと、節子のほった染めた赤が春色に見えたのは、北国から来たばかりだからかも知れない。今回、「優秀作」全てが《自画像》となった。読者に訴えかける訴求力がそれだけ強い絵画なのだろう。



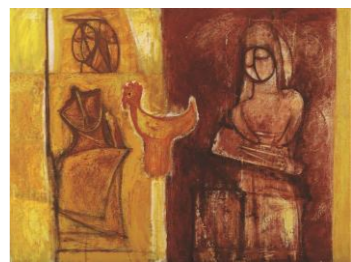
三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI

【佳作】

鳥と琴を弾く埴輪

雨の午後鳥と琴弾く埴輪の絵時が過ぎても心に残る

愛知県一宮市 小塚 俊博

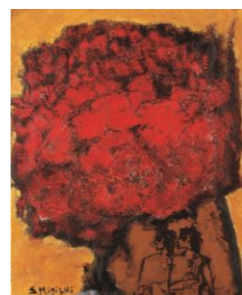


三岸節子
《鳥と琴を弾く埴輪》
1957年 ©MIGISHI

花

脳のやう火山のやうな花の絵だこれが花だと花と云ふのか

愛知県一宮市 鈴木 有



三岸節子
《花》
1989年 ©MIGISHI

さいいたさいいたさくらがさいいた

ふりしぼる生命の叫びキャンバスに叩きつけたる節子のさくら

愛知県稲沢市 大熊 信吾



三岸節子
《さいいたさいいたさくらがさいいた》
1998年 ©MIGISHI

自画像

射抜くよに我を見つめるその瞳鏡の向かふの節子の魂

愛知県稲沢市 安田 一子



三岸節子
《自画像》
1925年 ©MIGISHI

さいいたさいいたさくらがさいいた

コロナ禍の立春なればさくらさく季節ときぞ待たるるこの年はなほ

愛知県江南市 大塚 清子



三岸節子
《さいいたさいいたさくらがさいいた》
1998年 ©MIGISHI